父や母の戦争体験を若い人たちに伝えていきたい

松岡　勲

今年一月二二日は、中国で戦死した父の八〇年目の命日だった。その日に合わせて、エッセイ集『父の遺した椅子』を自費出版した。父の戦死と母の戦後の苦労に関わっての「私の戦争の記憶」を中心としたものだ。今、私が切に願っていることは、父や母の戦争体験を若い人に伝えていきたいということだ。そこで『父の残した椅子』からいくつか文章を引き、みなさんにお伝えしたい。

父の遺した椅子

家には父の遺した古い椅子がある。松の木からできていて、濃い茶色というよりも黒に近いごつごつした感触の椅子で、持ち上げるとずっしり重い。この椅子は亡くなった母がとても大事にしていた。母が暮れの大掃除の時に玄関上の高い所を拭く際にはかならず台にしていた。「これはお父ちゃんが作ったものや」は母の口ぐせだった。母が亡くなって、今も私は本棚の整理の時などに使っている。

父は大工だった。今、手元に一葉の写真がある。戦前のわが家の棟上げ式の写真で、背後に神棚があり、白い装束の三人の神官を真ん中に、右に黒い着流しを着たまだ二十歳代の父がいる。一緒に家を建てた大工仲間が左に二人写っている。頭上には一抱えもある梁が四本見えている。母はこの梁も自慢で、家に来た近所の人にいつも誇らかに語っていた。

父は二度目の応召の後、中国の武漢の近郊で一九四五年一月に戦死した。父には顔を写真でしか見てもらっていない。私も父の顔を見ていない。

母は卒寿の祝いを親戚にしてもらって、七か月後の二〇〇七年三月に亡くなった。母の九回忌には、いとこたちが集まった。法事の後の懇親の席でいとこの裕ちゃんが次のように言った。

「おばちゃんには言えなかったことやが、これは親父が言っていたことや。おっちゃんが二度目の出征をする時、その見送りにカフェの女の子が来ていて、涙を一杯ためていたそうや。おばちゃんは知らないことやが」。

今まで父を写真で見ることはあっても、その姿や形、声の記憶、父の思い出など一切ないので、私は父の存在を実感できないできた。この話を聞いて初めて、父をひとりの人間として感じることができた。

それからのことだ。友だちと飲んで夜遅く帰る時、今はアーケードができ、煌々と明かりが照らす商店街を心地よく歩きながら、空想が浮かぶ。戦前もこの場所に同じ商店街があった。木造の平屋の商店が並び、街灯にほのかに照らされるなかを、父が着物姿で酔って、河田晴久の歌謡曲「地球の上に朝が来る」（昭和十五年、一九四〇年）を唄いながら、下駄の音も軽やかに歩いて行く。

少しは父を近くに感じられた。

地球の上に朝が来る　その裏側は夜だろう
西の国ならヨーロッパ　東の国は東洋の
富士と筑波の間に流るる隅田川……

「うちのお父ちゃん、向こうで人、殺しているはずや」

高校一年生になったばかりの時（一九五八年）、当時の皇太子（現上皇）と正田美智子さんとの結婚パレードがあった。やっとわが家にもテレビが入り、テレビ中継を見ていた。皇太子夫婦が乗った馬車が写っていた。そこにひとりの少年が投石をし、馬車にかけよったのが見えた。テレビ中継を見ていた私は、内心で「やった！」と叫んでいた。少年は馬車に飛び乗ろうとしたが、警備の警官に取り押さえられた。

それから少し後のことだった。高校の屋上から茨木市の町並みを眺めていた。不意に「この屋根の下には、生きていると父と同じ歳頃の人たちがいるはず」という想いが脳裏をよぎった。息せき切って走って帰って、その思いの内を真っ直ぐに母、春枝にぶつけた。

「お母ちゃん！　うちのお父ちゃん、戦争に行ってるんやから、向こうで人、殺しているはずや」

母は裁縫していた手を止めて、私の言葉を撥ね返した。母の顔は真っ青だった。

「うちのお父ちゃんは、虫も殺さんええ人やったから、絶対そんなことあらへん！」

その言葉に私は返すことができなかった。

当時、私の言葉をそのまま受け止めてくれると思っていた。しかし、高校生になった息子から突然発せられた問いに、母は内心は大変な動揺を感じただろうが、到底肯定することもできなかったのだろう。

私は徐々に父が殺す側にいたという認識を持つようになった。しかし、その後、母から拒否された「父と戦争」についてのこの問いかけを再び母に向けることはできなかった。

母はリンパ癌で闘病の後、二〇〇七年二月に九〇歳で亡くなった。父の戦死を聞いた時、母はどのような思いだったのか、生前に母が戦争に対して持っていた内面の感情や思いを充分に聞き取れないままだった。

父と母の姿もう一度をとらえ返したい

冊子『父の残した椅子』を多くに友人・知人にお配りした。

近所に住む私より六歳年上の中島孝和さんから、父の二度目の出征の際、カフェの女性が涙を浮かべて見送っていたという話について、絵入でカフェの場所を記した地図を届けてくださった。

私は敗戦の前年の三月生まれなので、戦中の記憶はないのだが、中島さんは私より年上のため戦前の記憶があり、実際にカフェはあったことを覚えておられたのだ。それは右手に明治元年創業の精肉店「とり粂」のある、当時では、珍しく細長い「洋館」とのことだった。それで一度も顔を見たことのない父のイメージがまた新たになった。

父のことでもう一つ気づいたことがある。出版後、吉田裕著『続・日本軍兵士』（中公新書）を読んだ。父の一度目の出征に関わることだが、そこには次のようにある。一九三七年の七月七日に

起こった盧溝橋事件から日中戦争が勃発した。「陸軍は、多数の軍隊を派遣して大規模な攻勢作戦を実施し、一九三七年一二月首都の南京を、三八年五月二日は徐州を、一〇月には武漢・広東を占領した。」（七二ページ）父の兵籍簿には、「自昭和十三年五月一日至六月二二日徐州会戦参加」「自八月一日至十一月三十日武漢攻略作戦参加」とある。明らかに父は侵略軍の一員として派兵されて、行軍していたのだった。（他の攻略作戦参加については省略）二〇一九年九月に出版した『靖国を問う　靖国遺児参拝と靖国集団合祀』（航思社）でもその事実は記しながら、「無意識」のうちにその事実認識を避けていたのだった。南京虐殺に至る一連の加害事実と父の武漢攻略作戦参加とを切り離して認識していたのだった。あらためて肉親の「加害者」としての立場を認識することのむずかしさに気づいた。父を侵略軍の一員として冷徹に捉える必要を感じた。

冊子を発行した後に母についての認識が希薄になっていることに気づいた。父の戦死後、母は再婚せずに私を育ててくれた。私は「お母ちゃん子」として育ち、子どもの頃は母の影響が強かった。一方、父は会ったことのない存在として、私の中では「不在であり」、父のことを想起するときは「悲しみ」と「寂しさ」の感慨を伴った。だが冊子を発行して、自分なりに父を取り戻せた代わりに「母の存在が希薄」になっていた。父を失うことによってもたらされた母の「苦しさ」「悲しさ」「寂しさ」を今あらためて想像し、母のお思いをつかみ直したいと強く感じている。そう思う時、子どもの頃のひとつの光景が目に浮かぶ。これは母の思い出でもある。

父の戦死公報が母に届いて、一年ぐらい後のことだ。後年に母から聞いた話だ。「地域の合同慰霊祭があって、午前中、親戚が集まり『お父さんが帰って来る』と聞かされたお前は走りまわって、はしゃいでいた。けれども午後にお寺に行き、白木の箱がならんでいるだけと知って、お前は、『お父さん、どこにもいいひん・・・』と悲しそうやった」と。私にはその記憶がないのだが。

私には、母方のいとこたちがいて、そのつき合いは父方の親戚よりも濃い。いとこたちは「おばちゃんによくしてもらった。大好きなおばちゃん」とよく言ってくれて、亡くなってからも母の法事等を熱心切り盛りしてくれた。この話をいとこたちにすると、「おばちゃんが言っていたこと」として教えてくれたことがある。「慰霊祭に白木の箱がもどってきた時、白木の箱には骨はなく、石しか入っていなかった」と。この話は母からは聞いていなかった。

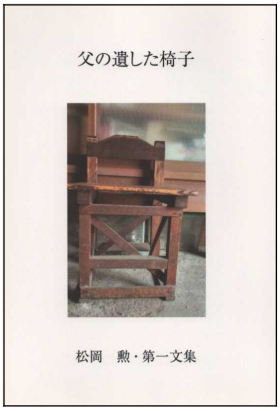
今あらためて思い起こすと、母には戦前に結婚し、子どもを産んだ女性としての苦労がたくさんあったと思う。靖国合祀取消訴訟に参加した二〇〇七年八月に「母と靖国」というメモを書いたが、そこに立ち返り、もう一度母が歩んできた人生をたどり直したいと思っている。

以下、そのメモから一部分を引く。

父に一度目の召集があり、父と母は一九三八年に仮祝言をあげる。召集解除後の一九四〇年暮れに結婚生活に入り、その二年後、私の兄弘和を産んで、やっと松岡家の籍に入れられた。戦前の女性の置かれていた社会的地位をあらためて感じた。「子（男子）

なきは去れ！」の、時代だった。
　その兄も戦時中の食料事情の悪さから、一か月ほどで死亡した。母から黄だんだったと聞いた。母は毎月の命日に（父の命日とあわせて）お坊さんにお参りに来てもらっていた。よく「今日は弘和ちゃんが亡くなった日なんや・・・」と言っていた。よほど辛かった記憶があったのだろう。
　ということは父と母との結婚生活は、四年あまりになる。そのうち一年間、父は中国の戦場にいたから、実際には三年ほどしか一緒に暮らしていない。
　つくづく思うのは、このような経緯を母が生きているうちに聞いておけばよかったと後悔している。

（追記）この文章は「フリーターユニオン福岡」（第五五号）に掲載したもので、転載しました。また「（書評）松岡勲『父の遺した椅子』　日野範之」は『樹林』（第七一三号、大阪文学学校発行）に掲載されたもので、執筆者の了承を得て、転載しました。



【書　評】

松岡勲『父の遺した椅子』

日野範之

父の戦死八十年の供養として

　作者は大阪文学学校の文章講座（日野担当）に二〇二〇年の秋期から出席。が、コロナ禍で順調には出席できず二二年から再開、二ヵ月に一回の宿題〆切には確実に提出し、その連作が今回、本書に実った。
　作者のお父さんは一九四五年一月二二日、中国の武漢の近くで戦死された。本書はその八十年目の命日に供養出版。
　一章「父の遺した椅子」十篇、二章「友人たちへの追悼文」五篇。全四八ページで読みやすい。

　表題となっている「父の遺した椅子」は、印象深い。大工だった父は二度目の応召で、作者の赤ん坊写真しか知らぬまま戦死。
　父が遺した椅子は「松の木からできていて、濃い茶色というより黒に近いごつごつとした感触の椅子で、持ち上げるとずっしり重い」。父の存在そのものの椅子が表紙写真である。
　母は卒寿祝いの七ヵ月後に逝去。その九回忌に、いとこが自分の父から聞いた話として、勲さんの父が二度目の出征の時、見送りにカフェの女の子が来ていて、涙を一杯ためていたそうや、と。

「この話を聞いて初めて、父をひとりの人間として感じとることができた」と作者。そのあと父が着物姿で酔っぱらって歩いただろう道を歩くとき、父が歌ったろう歌が浮かんでくる。

〝地球の上に朝が来る／

その裏側は夜だろう…

――短篇小説の味わいがある文章だ。

＊

もう一つ、靖国神社遺児参拝団についての文章が重い。作者は、靖国遺児参拝についての二つの反応を記す。一九五八年七月に靖国参拝した作者自身は、

「…僕たちの同じ年頃の男の子たちが、この暑い中で靴を磨いている。そうだ、僕には母もいる。父も見守っていてくれている。もっともっと強くなり、鍛え、みがき、立派な社会人となり、母を連れて靖国神社を訪ねよう…」

作者は「靴磨き少年を『上から視線』（一種の「選良意識」）で見ていた」と。……これと対照的な「国家の嘘を見破った少女」として、作者は次の文章を紹介する。

「…父は召集令状、赤紙一枚によって繰り人形と化され、別れたくもない親、妻子、知人との別離を命ぜられ、且つ犠牲の美名のもとに死をも命ぜられたのだ。私は靖国参拝を喜ばしい事とも、目出たい事とも思わぬ。こうした日を与えられた私を不幸と悲しむ」

作者はこの鋭い視点で書いた人に会いたいと訪ねるが、彼女は二十代後半で亡くなっていた。落胆は大きかった。

＊

高校一年になった時、高校の屋上から茨木市の街並みを眺めて、ふいに「この屋根の下には、生きていると父と同じ歳頃の人たちがいるはず」と思い浮かぶ。息せき切って家に帰ると「お母ちゃん！　うちのお父ちゃん、戦争に行ってるんやから、向こうで人、殺しているはずや」と叫ぶ。裁縫していた母は真っ青になり「うちのお父ちゃんは、虫も殺さんええ人やったから、絶対そんなことあらへん！」と。その言葉に私は返すことができなかった、と。

戦争加害を考えるきっかけともなった。作者は後年、靖国訴訟に参加してゆく。

戦後八十年の今年、格好の本が出た。

★本書を希望する人は、

〒５６７・０８１９　茨木市片桐町１の８　松岡勲まで。